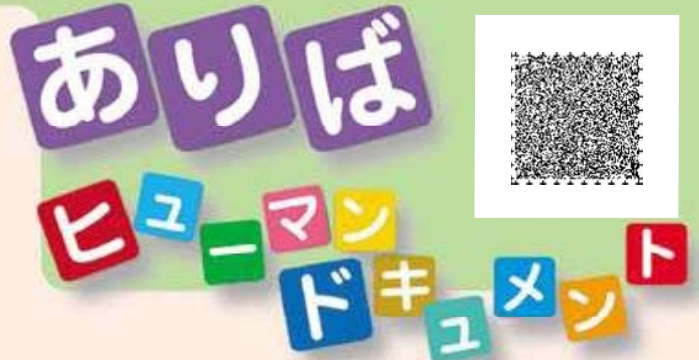




図書館でみんなで読書



NPO デフ Net. かがしま 学童保育デフキッズ  
ふくしま けん ぞう

## 【福島 健三 さん】 鹿児島市

### 子どもたちのいきいきした表情が印象的な 「学童保育デフキッズ」

#### 子どもたちが「ありのまま」 でいられる環境を

机の上に宿題を広げながら、手話で楽しげにおしゃべりする子どもたち。ここはろう者の福島健三さんが指導員として活動する、『学童保育デフキッズ』の日常の「コマだ」。

ろう児・難聴児を対象にした学童保育の『デフキッズ』は、ろう者と健聴者が互いに認め理解し合う、バリアフリー社会の実現を目指して、さまざまな事業を展開する「NPO デフ Net. かがしま」が、2005年7月に鹿児島市の障害児学童保育支援事業として始めた。

結成当初は中学生がメインだったが、活動内容が口コミで広まり、現在は小学生から高校生までの約10人が、月曜と金曜を除く平日の放課後と土曜日を『デフキッズ』で過ごしている。学校を終えた子どもたちは、『デフキッズ』で宿題をしたり、本を読んだり、近くの公園で遊んだり、とにかく元気いっぱいだ。

福島さんは、『デフキッズ』が開所する2年前から、『デフフリースクール』のボランティアとして活動。ここでたくさんのお話を学んだ福島さんは、会社を退職、『デフキッズ』の指導員として新たなスタートを切った。「ゼ口からの出発で最初は戸惑うことばかり。子供たちと一緒に経験していくことで、少しずつカタチになってきた」と当時を振り返る。

#### やれることがたくさん あることを知ってほしい

『デフキッズ』では、成人ろう者と手話ができる健聴者のスタッフが、手話を中心にコミュニケーションを図り、子どもたちが「ありのまま」でいられる環境の中で、多彩な活動を通して健全な成長を図ることを目標としている。

中でも、大切にしているのが「自分で考え、自分で責任を持って行動すること」。その一つに、「仲良く遊ぶ」呼びかけは頭をたたくかないなど、子どもたちが話し合って決めた「デフキッズのやくそく」がある。また、子ども同士のけんかも上級生を中心にできるだけ自分たちで解決するほか、上級生が下級生を世話するなど、お互いを思いやり、自発的に行動する雰囲気づくりがなされている。

福島さんは「ろう児・難聴児は音について知らないため、バスの中で騒ぐとどれだけ迷惑がかかるかが分からない。社会に出たときに失敗しないように」

「学童保育デフキッズ」指導員で、手話講師も務める福島健三さん



宿題の合間にみんなでレクリエーション



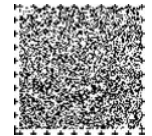
みんなの願いを込めて…。「世界はみんなであつ」の手話

うに、公共のルールもきちんと教えた」と話す。

通常の活動以外にも、他の学童保育や小学生との交流、福祉体験や牧場一日体験など、さまざまな野外活動も行っている。「いろいろな人との出会いを通して、手話や口話、筆談、空書、ジェスチャーなど、たくさんコミュニケーション方法を身につけてほしい。また、いろいろな経験を通して、やれることがたくさんあることを知り、それを自信にしてほしい」と話す福島さん。子どもたちの日々の成長を実感しながら、子どもたちが未来の成人ろう者のモデルとして活躍する姿を今から楽しみにしている。



特定非営利活動法人 「NPO デフ Net. かがしま」  
〒890-0015  
鹿児島市草牟田町 5-22  
TEL 099-255-0615  
FAX 099-201-3192  
URL <http://www.deaf-net.org/>

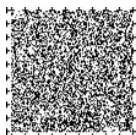


誰でも気軽に参加できる  
フライングディスク

障害者と県民とのふれあいの場、心の交流基地として親しまれている「ハートピアかごしま」。その施設内にある「県障害者自立交流センター」は、プールや体育館、多目的ホールなどの施設を提供し、障害者スポーツ、文化活動の支援や交流を促進するための各種事業を行っている。

センター内にはテニスや太極拳、卓球、水泳、フライングディスクなどの教室があり、健康づくりや友達との交流などで賑わっている。利用者のニーズにこたえ新しい種目も開設する中で、フライングディスク教室のOBたちが活動する「UFO（フライングディスクの自主グループ）」は障害の有無や程度に関係なく誰でも参加できる今人気のスポーツ。メンバーは男女合わせて現在15人。25歳〜72歳まで幅広い年齢層で和気藹々と毎週練習に励んでいる。

管理・スポーツ指導員の加治屋哲郎さんは、「仲間づくりが基本。障害があってもリハビリに始まり、試合に出場するほどまでに回復している人もいます。楽しみを見出すことで、スポーツはすごい効果を発揮するんです」とアピールする。



## ハートピアかごしま 鹿児島県障害者自立交流センター フライングディスクの自主グループ(UFO) 「スポーツに親しみ、仲間づくりの輪から 楽しさと目標を見出してほしい」



フライングディスクの投げ方を教える池田さん

プラスチック製でやわらかく、当たっても痛くないフライングディスク(障害者用)



毎週練習に励む「フライングディスク」の自主グループ

「自分にも目標が持てる」と思えることが大切

手話をしてくれた池田輝男(69歳)さんは、フライングディスクを始めるようになって10年。続ける秘けつについて「このスポーツは的を狙い輪を通す競技なので、集中力が一番大切です。精神的なものが大きく作用します。おごらず努力すること。障害や年齢もまったく関係ないので、仲間達と楽しんで参加していますよ。気持ちをいつも若く保つてます(笑)」と生き生きとした目で伝えてくれた。

障害者のスポーツの祭典である「22年度県障害者スポーツ大会」が5月に開催され、6競技(陸上、水泳、卓球、フライングディスク、アーチェリー、ボウリング)1種目(レクリエーション)に1094人の選手が参加した。交流センターのフライングディスク大会も11月開催予定で、池田さんも目標に向けて今猛特訓中だ。また今年10月、千葉県で開催される「全国障害者スポーツ大会」には、鹿児島県からフライングディスク競技に6人の選手が参加予定。種目はアキュラシー(輪を通す競技)7mと5m、ディスタンス(距離を競う)が行われる。

加治屋さんは「障害を持っている人は幼いころからスポーツをしていない、スポーツに出合える機会がなかったという人がたくさんいらっしゃいます。でもここに来れば『こういうことができるんだ』『自分にも目標が持てるんだ』と思えるようになるんです。楽しく参加して目標を持つことが大切」と話した。

